ラジオ放送

＜平成25年7月～9月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.404

もくじ ～*contents*

＜取次を頂いて＞

☞ 取次を頂いていきいきと生活されている方を紹介

●第１回　四方八方感謝　*page 1*

●第２回　１８０度の転換　*page 5*

●第３回　神様に身を任せて　*page 10*

●第４回　サラリーマンの道を求めて行きなさい　*page 15*

＜平和＞

☞ 平和に関するおはなし

●灯りのともる暮らし　*page 19*

＜ラジオドラマ＞　「こんにちは、金光さま」

☞ 金光教祖にまつわるエピソードをドラマ仕立てで紹介

●第１回　突然の嵐　*page 23*

●第２回　病み袋　*page 29*

●第３回　仙人になりたい　*page 34*

●第４回　大願成就　*page 39*

●第５回　神心　*page 44*

●第６回　病気見舞い　*page 50*

●第７回　教祖が強盗をしている…？　*page 56*

●第８回　厄年　*page 62*

●第９回　今日は吉日　*page 67*

《取次を頂いて》

第一回「四方八方感謝」

菊村　禮

♪雨　雨　降れ降れ　母さんが　蛇の目でお迎えうれしいな
　ピンチ　ピンチ　チャンス　チャンス　ランラン　ラーン♪

と、このような替え歌を有名な作家が新聞に載せていましたが、今まで実感せぬまま過ごしておりました。ところが昨年の春のこと、私は突然左足の付け根からつま先にかけての激しい痛みに襲われました。坐骨神経痛。内臓の病気からの疑いもあるということでＭＲＩの検査もして頂きましたが異常なし。原因不明のまま七転八倒。歩けず座れず、家でただ寝ているだけ。そのようなつらい暮らしが続き、体重も減り、「このままでは私の人生も終わりか」と、覚悟を決めたりも致しました。

　そのような中で、神様に一生懸命お願いしたところ、ようやく少し歩けるようになりましたので、やっとの思いで教会にお参りし、今の苦しい状況を先生に打ち明けました。すると先生は、「何よりもまず痛くないところのお礼を申し上げ、それから痛いところのお願いをなさい」とおっしゃいました。

　とにかく毎日痛くて痛くてたまらなかったのですが、専ら自分の心を徹底して痛みのない部分に向けるように致しました。「右足は？　痛みは感じません。おなかは？　全然…」。

更に、日頃は当たり前のように思い生活していることに対しても、感謝の念を向けるように致しました。「眼は？　はい、良く見えます。食欲は？　おなかならば空いて困るほどです。お通じは？　あぁ、それなら毎日ちゃんと…」と、このような感じで、朝から晩まで神様に感謝をし続けました。

すると、不思議なもので、「あぁ、なんてありがたいんだろう」と幸福感でいっぱいになってきました。体中がポッポッと温かくなってリラックスさえしてゆくのがよく分かりました。ここでお医者様から聞いたお言葉に納得しました。「痛みを感じるのは脳である。脳は気持ち良いのが大好き。脳が気持ち良く感じられるようにしてしまえばいい」というものなのです。

金光教の前の教主様は、「お礼の気持ちの大切さ」を終生説かれましたが、先取りのお礼についての教えも残していらっしゃいます。

それはどういうものかといいますと、「お風呂に入る前にもお礼を申しあげよ」というものです。すなわち先手必勝です。入る前に、お風呂にまつわる思いつく限りのお礼を申しあげるのです。水道からお水が出る。それを沸かすガスがある。一人で脱いだり着たりが出来る。自分で湯船に出入りが出来る。そのようなお礼を、申しあげてからお風呂に入らせて頂く。

お湯に漬かり、良い気持ちになってお礼。お風呂から上がって奇麗になって、またまたお礼。そうすることにより前向きのエネルギーが体中に満ち満ちて参ります。うれしい楽しい温かい

陽性のエネルギーに脳は気持ち良くなって、痛みを忘れてしまうという訳なのです。実際には、足はちっとも治ってはおりませんのに、「あッ、治っちゃった！　良かった！」と、喜び、朝から晩までお礼を申し上げ続けました。

すると、「あれ、不思議ですねぇ…何だか近頃痛くないわ…あら、いつの間にか治ってる」。お礼心のパワー・感謝の思いの、何たる不可思議な威力！　あらかじめのお礼、その効き目の素晴らしいことを知ってしまったらもうこたえられません。

大きな痛みを伴う病いを、私は、「お礼の心」を持つことで治して頂きましたが、すべての難儀を克服する力を、この、「お礼の心」は持っているのではないかと思います。どのようなさいなことでも、その気になれば、「お礼の心」を持つことが出来ます。手が洗える、爪も切れる…お皿が洗える。お箸が持てる。口笛が吹ける、唄も歌える、水が飲める、息が吸える吐ける…この世に生まれて、例えどのようにたどたどしくとも、一つずつ出来るようになり両親・家族が喜んでくれた、あのことこのこと…それらの動作を、神様からのプレゼントだと受け止めた時…お礼の心は、まさに、くめども尽きぬ泉のように、次から次へと湧き上がってくるものなのです。

自分の四方八方を、「お礼の心」ですっぽり包み込んでしまうんです。…あ、ほら、ちょうど、ケーキを作る時、上から下へとトロトロとおいしそうなクリームでコーティングされてゆ

くように。そうそう…あれも出来る、これもいい、ありがたい、なんてうれしい…。生地が出ないように、努めて注意を致します。生地とは、不平や不満の他にも、まだあります。自分の至らぬ点にばかり目を向け、悲嘆にくれたり、希望を失ったりすること。他人をうらやんだり、恨んだりすること。「明日、塩辛を食べるからといって今から水を飲むな！」という例え話のような、取り越し苦労をしてしまうこと。こういった生地が出てしまうと、とたんに、「あっ、痛たたたた」となるんです。

そうして――。「わーっ、治った！　治った！　万歳！　バンザーイ！」と、浮かれてはしゃいでおりました私に、教会の先生は、「痛いのが治ったのが有り難いのではありません。いつも元気でいられるのが有り難いのです。元気にならせて頂いた体と心をもって、さぁ、あなたは今から世の中のため、他人様のために、お役に立たせてもらわなければなりません」とおっしゃいました。

病気を治して頂いた今こそ、新たなる人生のスタートを切る時なのだと、つくづく感じさせて頂きました。これから先は、神様にお礼を申し上げるのみならず、他人様の幸福・助かりを、より一層強く願いつつ、神様からちょうだいした仕事に精いっぱい励ませて頂こうと思います。

痛いという大ピンチは、人助けのための人生が開ける、そのビッグチャンスとなったのでした。

♪ピンチ　ピンチ　チャンス　チャンス　ラン　ラン　ラーン♪

《取次を頂いて》

第二回「１８０度の転換」

（ナレーション）

愛媛県伊予市に住む佐野冨士夫さんは、ビルメンテナンスや人材派遣をする会社の常務取締役を務める五十八歳の男性です。

結婚当初、佐野さんの奥さんは金光教の信仰をしていましたが、佐野さん自身は信仰することに否定的でした。

「若い時でしたんでお許し頂くとしてですね、非常に宗教をする方っていうのは、弱い人間だな、というようには思っていました。ですから、

宗教によって神様に頼るというのですかね、そういうことが嫌いなものですから、そういうことが信仰なんだろうと自分で思っていたんで、そういうことが非常に嫌だったですからね」

（ナレーション）

転機は転職によって訪れました。それまでコンピューターのソフトを開発する仕事をしていたのですが、支店が閉鎖されることになり、やむなく転職することになったのでした。初めて担当したのは人材派遣部門の仕事で、ホテルに派遣された百人以上のパートさんの仕事を管理するという、全く経験のないものでした。

「そのホテルの責任者の仕事っていうのは、ほとんど人間関係だけでやっているところがありまして、部下の人ともそうですけど、とにかく人間関係をうまくいかさなあかんっていうのが大前提にありましてですね。そのためにはコミュニケーションも取らんといけないと。ですから前の仕事からみますと百八十度違う仕事だったですね。あの人間関係に対して、ものすごくしんどかったですね。いつ辞めようかというようなことが続きましたです」

（ナレーション）

金光教の教会にお参りすると、先生が悩みを聞いてくれ、神様にお祈りをし、アドバイスをしてくれます。これを、「お取次」といいます。仕事に行き詰まった佐野さんは、奥さんに強く

勧められ、お取次を受けるようになりました。最初は抵抗がありましたが、次第にお参りせずにはいられなくなったと言います。

「金光教のお取次っていうのは信者さんと神様の間に取次者、先生がおられて、こちらからお願いして、先生が神様にお届けして頂いて、神様の意志をまた伝えてもらう、そういうことだと思うんですが、私の場合は何か問題が起こったら、ある程度自分で回答というか答えをもって行くんですね。その中で実はこういう問題があってこういうやり方で解決しようと思うんですけどって、先生からもまた意見を頂いて、それを何回かキャッチボールしていく中で、自分で分かってくるというか、気付かせてもらうんですね。ただとにかくお話をさせてもらう、そういう問題の中で私自身も不満を持っている部分っていうか、はけ口としてそこでさせてもらったりして、そうなると割と気持ちが落ち着いてくるんで、それで何となく解決策っていうのが自分で分かってくるんかなあ、と思ったりもしますね」

（ナレーション）

仕事の帰りにお取次を受けるようになってからは、難しい人間関係の問題も解決していき、佐野さんにとって、お参りが自然なものとなっていきました。

「やっぱり仕事に行って、帰りに教会に寄っ

て、今日あったことをお話させてもらったりっていう、そういうような習慣というんでしょうかね、そういうものがありましたので、なんか安心感というのはありましたね、仕事していても。そういう生活になってましたから、頼るんじゃないんですけど、自分の中心の背骨になる部分っていうのが一つの信仰というですかね、それに変わっていったような気がします」

（ナレーション）

転職した当初は、ソフト開発の仕事に未練があった佐野さんでしたが、次第に考えが変わってきました。当時を振り返って佐野さんは言います。

「結局大学を出て、就職をしてコンピューターの仕事をさせてもらっていたんですけど、人付き合いが少なかったんですね。しなくても仕事が出来ていたということがあるんですけど。もともと私もあまり人付き合いがいいほうではなくて、しゃべり方も下手でしたから、そういうちょっと暗いイメージを自分でも持っているんですけど、今の会社に入ってホテルのほうで五年間勤めさせてもらったら、いろんな人間とお話しないといけないというのが出てきましてですね。自分なりに、仕事だからという前提があったんですけど、いろいろ話をしているうちに、なんか自分が明るくなってきたな。中で、ものすごく自分自身が変われていった。その五年間がものすごく充実していました。だから今の私があるのはその五年間があったからじゃな

いかと思えるぐらい、良かったですね」

（ナレーション）

嫌で仕方なかった転職が、お取次を受ける中で、とても価値のある体験に変わったのです。信仰の持つ力を身を持って実感された佐野さんは、その後、課長、次長、部長と昇進。そして十年目に取締役となり、今は多くの社員の先頭に立って仕事をされています。

時には会社を代表して取引先からのクレームに対応することもありますが、お取次という支えがあるだけに、どんな問題も乗り越えることが出来ます。

「まず、お客様の所に出向いていく前に、『神様、お願いします』、別にその向こうに、分かってくれっていうんじゃなくて、『自分が誠意を持って話が出来ますように』っていう形でお願いさせてもらって行きます。意外と、それがうまくいっているんか知れないんですけど、割と分かって頂けるいうことが多かったです。それでうまくいって、納得して頂いて、帰る時にまた神様に、『ありがとうございました』と、させて頂くんですけどね。そういうことが、ものすごく心強く感じます」

（ナレーション）

そう穏やかな表情で話される佐野さん。その笑顔には、信仰を支えにした、柔らかな強さが感じられました。

《取次を頂いて》

第三回「神様に身を任せて」

（ナレーション）

現在、京都府にお住まいの、小林けいさんは、七十歳のご婦人です。今まで、つらく苦しい時期もありましたが、その都度神様におすがりして乗り越えてこられました。

けいさんの信心は、おじいさんから始まります。おじいさんに手を引かれ、教会にお参りしていた当時を懐かしく振り返ります。

「何をしても子どもを褒めるっていうかな。くささないでね、そういう頭ごなしに、『悪い悪い』言うて、私ら孫に怒るのも、怒るんじゃなくて、『お利口さんやからやめような、お利口さんやからやめような』とかよう言われて。おじいちゃんに怒られた記憶いうのはなくてね、いつも何か何をしても褒められたなあとか、そんな記憶があるんです」

（ナレーション）

一緒に教会へお参りしても、おじいさんの周りで遊ぶけいさんを叱りもせず、一心に神様に祈る姿が、幼いながら、「優しいおじいさん」「立派なおじいさん」と感じたのだそうです。

そんなおじいさんの信心は、けいさんのお母さんにも伝わります。

「私、小さい時わがままでしてね。今になっ

てね、よく分かるんですけど、お母さんがずっと辛抱してきてくれたというか、『思ったことをすぐ言うちゃならん。もう1日辛抱しいな。そうしたら、ちょっと我慢出来る。三日経てばもう忘れるよ』とか言ってね。『今日言うことは、明日言いなさい』と、よく言われたことが記憶にものすごう残ってます。よく母が口癖に言ってたのはね、『不足言うちゃならん』言うてね、『ありがたいことをまず思わしてもらわんといかん』ていうことをね、母も実践してましたから。『自分は我慢してもね、人には良い物あげなさい』。自分はぼろを着てても、そういうのを実践しててね。とにかく人には一生懸命、自分は神様からおあてがい下さるんやと言う。『私はな、不自由せんな』とか言うてね。老後でもね、次々次々服を皆さんから頂いたりしてね。自分が買わなくても時代に合うたものを身に付けさせてもらって、自分が買わんでもええいうことでした。

それかいうて、ずっと我慢して我慢して、しんどうなるほどの我慢じゃなくて、すぐその場ですぐ神様に心向けていってたんやろうかな。『今このように思えます、何かつろうございます』と、神様に向けて言ってたんかなとか、今思ったらそのように思いますしね。

不足を言わない。最後の最後までね、『ありがとうな、ありがとうな』って、よう言うてました」

（ナレーション）

おじいさんは九一歳で、お母さんは百歳の大往生でした。そんな二人の影響か、信心は、自分を犠牲にすることではなく、その先には周りの人々の喜ぶ姿があることに自然と心引かれ、自ら教会へお参りするようになりました。

やがて結婚し、三人の子どもにも恵まれましたが、子育てで悩むこともありました。ご主人は仕事で忙しく、転勤ばかりで相談出来る人もいません。そんな時は教会の先生に相談に乗ってもらいます。その悩みを先生は神様にお願いされ、けいさんに言葉を掛けられます。

「『起こり得ることは皆、神様の思し召しのまにまにとして受け取らせてもらって下さい』。起こってくることはすぐ神様の思し召しやと言われてね。今やったら分かるんですけど、その頃は訳分かんなくて。これが神様の思し召しか。そんなピンとこなくてね。それでもね、有難く思わせてもらわんといかんのやなとか思って、分からせてもらったことあるし、『ああ、やっぱりこういうふうに自分が思わせてもらわんといかんのやな』と思いましたけどね」

（ナレーション）

先生は、神様からけいさんに掛けられた願いを話されると共に、温かく見守り、優しく励ましていかれました。

やがて、三人の子どもたちも成人していきます。しかしある日、長女が重い病気を患います。大きな不安に襲われ、居ても立ってもいられず、

先生に訴えかけました。

「最初に先生にお取次頂いた時にね、『小林さん、大丈夫やからな』言うてね。『マキちゃんのことは心配せんでええからな』言うて、その一言がいまだに忘れられないんです。そうしてここまでね、結婚までさせてもらえるようになったということがね、とっても私有り難いことですしね。考えられない自分の願い以上のね、神様はおかげを下さったんやなと思って。自分の願ってる以上のものをね、神様は用意して下さるんやなと思います」

（ナレーション）

教会の先生の力強い一言で、不安に包まれていたけいさんは救い出されました。病院での治療を受けつつも、全快するまでには長い年月が過ぎていましたが、教会の先生の言葉が大きな支えになりました。現在三人のお子さんたちは、それぞれに家庭を築いています。では、いつも忙しく働いていたご主人は、信心をどのように感じていたのでしょうか。

「あのね、自然体っていうか、無理強いをしないとかね。教えも自然やって言うんですね。『こうしなくちゃいけない、ああしなくちゃいけない』とかいうの、あんまりないでしょう。自然体ていうのとね、『あの人を連れてこなくちゃいけない』『人を集めんといかん』とか、そういうこともないですよね。自然体やからということもあるし、自然の道理に基づいた教え

ですよね。それが主人ね、『金光教やな』というふうに思わせてもらったんやと思いますね」

（ナレーション）

けいさんが信心を押しつけられたことがなかったように、ご主人にも自然と伝わり、定年退職した今では、毎日一緒に教会に参拝されています。

一心に神様に祈るおじいさん、いつも、「ありがとう」が口癖のお母さん。けいさんはその姿に支えられながら、今日も、心元気に過ごされています。

《取次を頂いて》

第四回「サラリーマンの道を求めて行きなさい」

植村博昭

「サラリーマンの道を求めて行きなさい」

大学を卒業し、鉄鋼マンとしての道を歩むことが決まった時に、金光教銀座教会の恩師から頂いた忘れ難いお言葉です。以後、このお言葉は、今日、企業人教育に携わる私の課題として、今も新たに求め続けている大切な問いでもあります。

長い人生には、様々な重要な節目の時があります。それはその後の人生の岐路でもあります。特に就職は、未来の自分の進路、そして生き方を決める重大な課題として迫ってまいります。

その重大な岐路を自分の限られた知識・経験・興味だけを物差しに、軽々しく決めるわけにはいきません。就職に際して確固とした基軸となる目標もなく、安易に職業を選ぶことは、自分の一生を貫く生き方の土台が揺らぎ、一貫した熟練の技や力も身に付かないのではとの危惧を感じたからです。その大切な進路決定を、私は神様の思し召しに素直にお任せしようと決心しました。

私の両親は、恩師を、「親先生」と仰ぎ、戦後の困難な生活状況の中を何事も神様にお願いし、親先生に何事もお伺いしながら生活してまいりました。その両親の信心生活の姿を見て育った私は、人生初の自分の運命に関わる重大事

をお取次頂くことにしたのです。

とは言え、私にも当時、一青年としての夢がありました。大学の教養学科に学び、学問の深遠さに憧れ、出来れば学者にとの夢から懸命に学業に取り組み、教職課程も修了し、教師の道をとも漠然と考えておりました。

一方、私は長男でもあり、就職して経済的に自立し、早く両親を安心させたいとの願いも強くあり、迷った揚げ句、神様の思し召しに全てを委ねる道を選び取ったわけです。そして自分の将来の処し方を白紙の心でお取次願いました。神様にお願いして下さっている間、心を透明にして待つ身の引き締まるような緊張感は今も忘れられません。その結果、鉄鋼・化学等重工業分野へとのご教示を頂きました。

よく、「企業は人なり」と申しますが、企業紹介にあった、「人を大切にする」という言葉が金光教の、「実意を込めてすべてを大切に」という教えに通じると感じたのが機縁で、未知の世界というべき製鉄会社を志願し、入社させて頂きました。こうしたご縁から、以後北海道室蘭を初任地として今日までの四十五年余りの鉄鋼マン人生が、そして恩師からの課題である、「サラリーマンの生き方」を求める生活と研さんの日々が始まったのです。

鉄鋼マンとなった私は、事務系社員で鉄の専門技術もなく、不安がありました。それを室蘭の鉄作りの基礎を固める三交替実習体験がぬぐってくれました。三交替実習とは一日を三つの番に分け、一週間毎に交替する体験実習です。

特に夜勤の明け方前の身を貫く北海道の寒さと、目の前を流れ行く金色に輝く銑鉄（せんてつ）の厳かさが今も忘れられません。鉄作りとは何か、という原点を、現場で働く先輩方の指導で、汗にまみれ無我夢中で体を動かして学んだことは、掛け替えのない体験でした。

今、私の手元に古びた一冊のノートがあります。室蘭での研修記録です。その中に、「単純な作業にも厳然たる目的、意義がある。それを自覚することによって、自分のなす動作に誇りが湧いてくる。そこにこそ、今私が感じている作業の楽しさの源がある」との記述があり、そこに指導員の、「実習でつかんだこの経験を長く忘れずにいて欲しいと願う」との言葉があります。こうした先輩から後輩へのきめ細かな指導があるからこそ、鉄鋼マンが長い時間を掛けて一人前に育つのです。

その時から四十五年余。私は今も企業人教育の現場に立たせて頂き、様々な人と業務、立場の体験を通じて培ったこの三現、現場・現物・現実を土台にした丁寧な人作りこそ育成の基本だと思うのです。現役時代の総務・組織・システム・能力開発・環境管理などの業務体験は、常に次の業務への、「準備」であったと今感じています。長い目で自分を育てること。今の若い方もぜひそういう育ち方をと願っています。

私をこうした人生に導いて下さった原点こそ、遠い日のあの恩師のお取次なのだと今心から感謝せずにはおれません。

今日、人間関係などの複雑さからか、心を病

む人々の報道に接するにつけて、私はここにその悩みを喜びに変えて下さる道、自分を主語にせず、神様を主語に心の親と頂くお取次の道があることを知って頂き、共に歩んでみませんかと申し上げたいのです。

「あなたの生き方は、真っ直ぐの一本道」と定年後のある日、室蘭時代から私を支え続けてくれた妻がしみじみ申しました。私が一本道を歩み得たとすれば、妻始め家族や出会った方々の支えのおかげであり、その根底にある天地のお恵みと両親がご縁を頂いたこの金光教のお取次の祈りに、厚く御礼申し上げずにはおれない私であります。

《平和》

「灯りのともる暮らし」

金光教大美野教会　阿部惠一

今から六十八年前、京都に在住していた私は大学に入学するや間もなく、学徒勤労動員令により、日本海に面する京都府与謝郡にあった軍需工場で働くことになりました。

ここは、日本海軍の航空機の整備、修理や生産を担う所でした。近くにある天橋立（あまのはしだて）の風光明媚（めいび）な場所を訪れる余裕などはなく、過酷な労働条件の中、私の仕事は、ひたすら山に入り穴を掘る、防空壕（ごう）を掘ることでした。作業は班で行動しますので、一人でも集合時間に遅れたり、ちょっとしたミスをすると、連帯責任として、「両足を開け、歯を食いしばれ！」と、班全員が平手打ちされることもありました。

しかし、私たちの指揮官は、いつも、「青春は意気込みであり、熱であり、顧みる時のほほ笑みである」という言葉を掛けてくれました。青春を謳歌（おうか）するなど想像も出来ない当時、「青春」という言葉を聞くことは、今考えてもまれであった思いますが、絶えず学生であった私たちに希望を失うなと言われているようにも感じました。

やがて月日過ぎて八月十五日、正午前に全員集合の命令を受け、工場にいる全員が、暑い炎天下の広場に集められました。直立不動の姿勢をとらされて待機していると、前方の机の上に置かれたラジオから聞こえる雑音混じりの声、

何の放送か分からぬまま終わりました。
夕方近くになって肩を抱き合って泣いている女子学生の姿、ラジオを通じての声は、後に玉音放送と言われた天皇陛下の声でした。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び…」と言われた戦争の終結、敗戦を告げられたお言葉でした。
この放送の後、ソ連軍が上陸してくるかも知れないなどの噂が流れ、工場内は騒然となり、広場では人が近寄らぬように銃剣を持った兵士が見守る中で、書類などを消却していました。徴用令によって工場で働かされていた人たちの中には、資材が納めてある倉庫に無断で押し入り、食料や衣類など、持てるだけの品物を盗んでいく人もいました。
私たちが工場を退去する時、私たちの指揮官は、「これからは君たちの時代が来るだろうが、体に気を付けて勉学に励むように」と、敗戦後、この先どうなるかも分からぬご時勢でしたので、これが今生の別れとなるやも知れぬ思いからか、泣きながら私たち一人ひとりの手を握り、励まして下さったことは、今も大切な思い出の一つです。
友人たちと帰郷するために最寄りの駅へ行き、乗車券を買い求めようとしましたが、駅員からは、工場から指示がないので乗車券の発売は出来ない、とのことでした。結局乗車券は買えず、友人と相談して、隣の駅まで行こうということになり、各自が所持品を入れたリュックを背負い、支給された転出証明書と乾パン一袋を受け取り、夜の八時ごろ、寮を出発すること

にしました。

暗い山道を歩き続け、峠を越えて、ようやく明け方、宮津駅に着きました。今でこそ、２時間ほどで帰ることが出来ますが、その時は、列車の乗車券の発売にも、遠距離に制限があり、京都市内へ帰るにも二度乗り継ぎ、支給された乾パンを食べ、水を飲みつつ、十九日の夜、まる一日を費やして、ようやく自宅にたどり着きました。

家族宛てに出すはがきも当時は検閲があり、余計な情報が漏れないように、差し障りがあると判断されればその箇所を墨で消されていましたので、突然の帰宅に家族は驚きましたが、お互いに無事であったことを抱き合いながら喜び合いました。京都市内は大きな戦禍は免れたとはいえ、数回にわたる空襲に遭い、尊い多くの命が失われました。

戦争が終わり、灯(あか)りが外に漏れないようにする夜の灯火管制もなく、少しは町の様子も明るくなったようでしたが、それでもまだ各家では、電力制限を強いられ、停電時にはろうそくの灯りに頼る日が続きました。

戦後の食料不足、物資の欠乏の生活、学校へ登校しても授業を担当される教授が栄養失調のため休校となることもあり、私たちも体力不足、栄養不足から免れることは出来ませんでした。

その後、京都市内に米軍が進駐する事態となり、各家では出入口を閉ざし、町の不気味な静けさの中を銃を持った兵士が巡回し、夜ともなれば各家庭の暗さに比して、米軍に強制的に取

り上げられた建物は、不夜城のごとく灯りがこうこうと輝き、暗がりの中に浮かんで見えました。

資源の乏しい国が資源を手に入れようと、戦場の拡大にもつながったのでしょうが、一般国民は、戦局の事実を知らされず、敗戦となれば、明日の日を、いや、今日を生きるために、各自が工夫、努力して生きていたように思います。

今もなお日々の新聞記事、報道される話の中に、国と国が争い、尊い命が失われています。

金光教の教祖様は、「人が人を助けるのが人間である」と教えておられます。私たちは到底一人では生きられないのはもちろんでありますが、人の間と書く人間という文字を見た時、私たちは、常に人と人との間にあってこそ生きていられるのが事実かと思います。

他の人との関係なくしては生きていくことが出来ず、この関係の中に、いつも穏やかに、生きている、いや、生かされている喜びを失わず、お互いが努力し合い、助け合いながら、平和な世の中を築いていく大切さを痛感しています。今日を喜び、明日を楽しむ生活を築くためにも、灯りのともる日々の暮らしに、今、「ありがとうございます」とお礼を申さずにはおれないのです。

《ラジオドラマ》

こんにちは、金光さま

脚本　柴田壽子

第一回「突然の嵐」

登場人物

近藤　二十代
梅子（近藤の妻）　二十代
車夫　三十代
教祖　六十八才

梅子　うちの人は、幼いころ占い師から、「二十五歳が寿命である」と言われていた。来年がその年に当たる。そこで今日あの人は、知り合いの信心深い方に、相談に行った。私は心配で家事も手につかず、帰りを待っていると……。

近藤　ただいま。

梅子　あ、お帰りなさい、それで何て言わはりました？

近藤　うん、岡山の大谷という所に金光様という生神様がおられる、そこへお参りしたらどうやと言われた。

梅子　そうですかそうですか、それは良かった。そやけど、ここ大阪から岡山とは、えらい遠いですなあ。

近藤　何の何の、ここの家はおやじの代まで、江戸と大阪を行き来する飛脚を営んできた家や、江戸までの百五十里も、ほんのひとまたぎやった。岡山なんて五十里ほどやろう。

梅子　そうかて、あんたのお体にこたえるのと違いますか？

近藤　いいや、それに神戸までは汽車があるやろ。

梅子　ほんま、そうでしたなあ。

梅子　私らが旅に出たのは明治十四年の年の初めだった。神戸で汽車を降り、後はひたすら道を急いだ…。

近藤　今日中に姫路まで行きたいもんやなあ。

梅子　へえ、お疲れやありませんか？

近藤　ちょっと…疲れたなあ。

梅子　ほな、どこかで一休みしましょうか。

近藤　うん。

梅子　あ、あそこに人力車がありますわ、あれに乗ったらどうやろう？

近藤　おお、それはええわ。

梅子　けど…何や人相の悪い車屋さんですなあ。

近藤　人相が悪いからいうて、悪い人とは限らん、腕も太いし力も強そうや、早いこと走ってくれるやろ。

梅子　そうかもしれまへんな。

近藤　おーい、車屋さん。

梅子　しばらく走った後だった。とある一軒の茶店の前で人力車が突然止まった。

車夫　旦那、今日は昼飯もまだなんで、ここの茶店で腹ごしらえをする間、ちょっくら待っててもらえまへんか。

（茶店の人に）おい、ばあさん、酒とつまみ物、早いとこ頼む。今日の寒さは格別や。

近藤　ほな、私らにはお団子とお茶でも。

梅子　そのうちに小雪がちらつき始めた。車屋さんは一向に腰を上げず、お酒のお代わりばかりしている。一体いつになったら…。

近藤　（車屋に）車屋さん、もう日は暮れるし、雪は降り始めてるし、早う姫路に行きたいんやけど。

車夫　旦那、姫路なんてもうすぐそこですわ。そう追い立てられると、せっかくの酒の味もまずうなってしまう。

（山寺で鳴る鐘の響き）

近藤　車屋さん。

車夫　へえへえ、ほなどっこいしょっと。お待たせしましたな。

梅子　緩い坂道にさしかかる、冷たい荒々しい風が吹き付けてきた、その時。

近藤　ちょっと車屋さん、こんな所で梶棒下して…、一体何…？

車夫　旦那さん、これから先の道はきついんですわ、車代もうちょっと上げてもらわんと。

近藤　でもそれじゃ約束が…。

車夫　ほんなら、降りて歩いて行ってもらおか。これから先、道はきついて言いましたやろ。

梅子　車屋さん！　そんなこと言うたかて……。

近藤　仕方ないな、そんなら…。

梅子　…と、うちの人が懐から財布を取り出した時。

車夫　（猛々しい笑い）　結構持ってるやないか（ハハハ…）

近藤　ちょっとあんた、わしの財布に手え出して！　何をするんや！

梅子　やめて！

（激しい雷鳴に雨、風）

車夫　何や、こ、こ、これは？　嵐や…！うわあああー！

梅子　ものすごい風で、私らの乗っている人力車は、突然くるりと向きを変え、今来た道へ吹き返されるように転がり戻って行

く。強い雨と風で私は生きた心地もなく、必死で夫の腕につかまる。…と、一軒の家の前で車が止まった。

（戸をドンドン叩く）

近藤　こんばんは、こんばんは！　ここに泊めて下さいな！　お願いします！

（囲炉裏の火のはぜる音）

梅子　良かったですなあ、泊めてもらえて、一時はどうなることかと肝が冷えましたわ。

近藤　梅子、空を見てみ、さっきの嵐がうそのように星が瞬いてる。

梅子　ほんまになあ、あれは一体何でしたんやろな。神様が守ってくれはったんですやろか…。

近藤　やっと大谷に着いたな、もうすぐや。

梅子　あ、あそこと違うかなあ…。

近藤　そうですやろか、随分お粗末なお社のようですけど。

近藤　それはそうやけど。梅子、あそこに肥えた黒髪のご老人が座っておられる、お弟子さんやろうな。

梅子　そうですやろ、金光様てどんなお方か、あの人に聞いてみましょう。

近藤　ごめん下さい。

教祖　あなた方は、大阪から参られましたのか？

近藤　えっ、もしや金光様！？

教祖　よく遠方からお参りに来られました。道中でも、神様の良いおかげを受けられましたね。

近藤　は、はい、そのとおりでございます。

梅子　ありがたいことでございますが、金光様。

教祖　何ですか？

梅子　失礼ながら、あまりにもお社がお粗末なようにお見受け致しますが…。

近藤　梅子、何ちゅう失礼なことを。

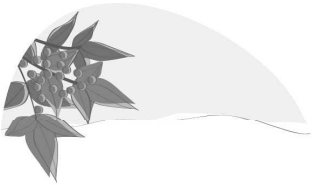
教祖　はは…これで結構。神様が社に入られたらこの世界は暗闇です。この神様は天と地が社、これで十分です。

梅子　天地が社？

近藤　ははあ…、そう言うたら、私たちがここへ参ります道中はおろか、日本、いや世界中が社でございますねえ。

梅子　それでしたら、私どもが昨日の災難からお守り頂いた訳が、よう分かりました。

近藤　金光さま、ありがとうございます。心の雲が晴れました。



第二回「病み袋」

登場人物

ミツ　八才
吾一・孫も　八才
母（ミツの母）三十代
教祖

吾一　やーい、病み袋、病み袋。
ミツ　違うよ！　あたしの名前はミツよー。
吾一　この間の運動会でも走らなかったじゃないかー。
ミツ　走らなかったけど、応援してたわよ！
吾一　駆けっこにも出ないなんて、病み袋だ！
ミツ　病み袋って、何よ！
吾一　ミツは病気の袋だ、みんなそう言ってるよー。
ミツ　吾一の意地悪…！（泣き出す）母ちゃんに言いつけてやる。
母　そう、そんなことがあったの。そりゃミツはもともと体が弱いし、時々学校もお休みするけれど…。ねえミツ、今度金光様の所に一緒にお参りに行く？
ミツ　母ちゃんがいつも行っている所？
母　そうよ。
ミツ　金光様って、白い長いひげのおじいさんかなあ…？
母　（笑う）ねえ、そして、ミツの思っている

ことをお話してみたら？

（小鳥の囀り）

ミツ　晴れた日、母ちゃんと金光様の所に行った。

ミツ　わあー、こんなに絵馬がたくさんある！ねえねえこの船の絵、あたし好きだなあー。

母　それはねえミツ、船が難破しかけた時、助かった船乗りさんが、お礼にここに掛けたの。さあいつまでも絵馬で遊んでないで、早く金光様にごあいさつしましょうね。

ミツ　あそこに座っている白い着物に黒い羽織の人…。ねえねえ母ちゃん、あれが金光様？

母　そうよ。

ミツ　（独り言）なーんだ白い長いひげのおじいさんじゃないんだ。おじいさん、こんにちは…。

母　ミツ、何てこと言うの。

教祖　ハハハ…。ミツさんから見れば十分におじいさんですよ。よう来られましたなあミツさん。

ミツ　はい。

教祖　ミツさんは、今こう思っているのではないかな。

ミツ　え？

教祖　「私の長い眉毛が目にかぶさりそうだ、

気になってしょうがない。ちょっと引っ張ってみたい」とね。

ミツ　はい、そうです。ゆらゆら動いて面白いです。

母　もう、ミツ、何てことを！

ミツ　母ちゃんはあたしをにらんだ。でもおじいさんはにこにこしている。

ミツ　金光様、あたしは学校の友達に、「病み袋」って言われています。それで悔しくって…。

教祖　それはねミツさん、ミツさんの家は海のそばでしょう、寝ている時、波の音がバザーバザーと聞こえるよねえ？

ミツ　はい、聞こえます。

教祖　朝、目がさめて波の音が聞こえたら、「天地の神様、私は何も分からずに眠っておりましたが、目がさめたらこうして生きております、波の音が聞こえます。今日の命を頂きましたことをお礼申し上げます」と言うんだよ。分かるかなあ。

ミツ　はい、分かります。

教組　そして次に、お天道様が照っているだろう。

ミツ　はい。

教祖　そのお天道様に、「今日もお日様を拝ませて頂きまして、ありがとうございます。今日一日、天の神様、地の神様、私が元気で役に立つように、どうぞ助けて下さ

い」そうお願いすればいいんだよ。生きているから、喜ぶことも、悲しむことも出来るし、また病気にもなる。まず生きていることに、神様にお礼を言うのだよ。ちょっと難しいかなあミツさんには…。

ミツ　分かりました。今まであたしは、「病み袋」なんて言われて、お天道様を恨んでいました。ごめんなさい。

教祖　ハハハ…。ミツさんは良い子だ。「病み袋」なんて言われても、もう気にすることはないんだよ。

ミツ　金光様の言われたことは、本当はあたしにはちょっと難しかった。でも、あの眉毛のおじいさんは大好きになった。

（海、波の音）

ミツ　（元気な笑い声）

母　ミツ、そろそろ帰りましょう。

ミツ　もうちょっと…。

母　疲れてない？

ミツ　大丈夫よー、お天道様が守って下さるから。あっ、これ奇麗、わあー、母ちゃん母ちゃん…。

母　どうしたの？

ミツ　あっ、あのね、あの…。ううん、何でもない、内緒。

母　変な子ねえ。

（波の音徐々に消えて）

ミツ　あたしは母ちゃんにお願いして、またあの眉毛のおじいさんの所に行った。

ミツ　おじいさん、こんにちは。

母　（小声）　ミツ、金光様と言いなさい！

教祖　ああ、ミツさん、こんにちは。

ミツ　おじいさんに…。

母　ミツ！

ミツ　あ、金光様に…。

教祖　おじいさんでいいんだよ。

ミツ　この間、海に行きました。

教祖　楽しかったかい？

ミツ　はい、それでこれはおじいさんへのお土産です。

教祖　ほうー、これは奇麗な巻き貝だね。私のために取ってきてくれたのか　い？

ミツ　はい、そうです。

教祖　おやー、耳に当てると、波の音がするよ。

ミツ　本当？

教祖　ほら、聞いてごらん。

（かすかな波の音）

ミツ　本当だ。聞こえる聞こえる。うれしいなあー、あたしはおじいさんと一緒に海に行きたかったの。でも母ちゃんが、駄目だって。

教祖　ありがとう、ミツさん。

ミツ　こうして度々お参りし、神様にお喜び頂けるような一日が過ごせますようにと願いながら、命のお礼を申しました。
気が付いたら、「病み袋」の私は八十八歳を迎えていました。

孫　おばあちゃんおばあちゃん、お誕生日のお祝いの支度が出来たって、お母さんが呼んでるよ。

第三回「仙人になりたい」

登場人物
吉蔵（きちぞう）　（三十代）
しの　（同・吉蔵の妻）
教祖

しの　また言うてはるんですかあんた、もう聞き飽きました。
吉蔵　へえ？
しの　そんなに仙人になりたいんですか？
吉蔵　そうや。
しの　何でです？　毎日毎日寝言みたいに、仙人になりたい、なりたい言うて。あんた金光

様を信心してはりますやろ。それで十分ですがな。

吉蔵　そやからや。

しの　何です？

吉蔵　金光様も仙人みたいなお人やと思てるんや。わしらの考えてることをピタッと当てはる。

しの　だから？

吉蔵　わしもそれに近付きたいと思うんや。これまで修行らしい修行も積んだことがない。それで一念発起して、自分の心と体を鍛えようと思たんや。

しの　へえー、それでどないしはるんですか？

吉蔵　まず、山に入る。

しの　山？

吉蔵　そうや、深い山や。深い山に入って行をする。

しの　どんな修行です？

吉蔵　山を走ったり、滝に打たれる。木の実や草を食べて生きていく、そのうちに水だけ飲んで暮らせるようになる。

しの　えらい不自由なことですなあ。まるで忍術使いの稽古みたいですな。

吉蔵　忍術使い？　アホなこと言うな。その不自由に耐えることが、行になるとわしは思うんや。

しの　そうやろか？　あんたやったらまず病気になる方が先やと思いますけどなあ。それで、何日くらい山にこもらはるんですか？

吉蔵　さあー、やったことないし、分からんなあ。半年か…、一年か二年か…。

しの　その間、この店の商いは、どないしますんや。

吉蔵　おまえと丁稚（でっち）がおるやろ、こんな履物屋わしがおらんでも何とかなるて。そんでな、そうして行をしているうちに、かすみを食べるだけで、生きていけるようになれるかもしれん。そしたらある日、仙人の師匠が迎えに来てくれる、ということもあるやろ。それで、雲に乗って空を飛ぶ術も教えてくれるかもしれん。

しの　アホらし、あんた、昔の何やらいう話、えーと…そやそや、久米の仙人や。雲に乗って飛んでいた仙人が、ふと下界を見下ろした時に、川で裾をからげて洗濯していた若い女のふくらはぎが目に入って雲から落ちた、いう話に影響されてるんと違いますか？

吉蔵　えっ、そんなんおまえに言われるまで、思い出しもせんかった。

しの　あんたなんて、仮に、仮にですよ、空を飛べたとしても、あちこち目が泳いで、すぐに落ちて、けがするに決まってますやん。何でそんなアホな夢みたいなことばっかり、考えるんですか。

吉蔵　アホな夢やて！　あーあ、おまえの減らず口は相変わらずやなあ。そうや、おしゃべりのおまえにうってつけの行がある。

しの　何です？

吉蔵　無言の行や。

しの　…。

吉蔵　そや、思い立ったが吉日や、あしたから山

に行くから弁当作ってくれや。

しの　…。

吉蔵　なあ。

しの　…。

吉蔵　何で黙ってるんや？　何か言えや。

しの　無言の行をせい、言うたのはあんたですよ。第一、行をしに山に行くのに、何でお弁当が要るんですか？　さっき、木の実や、草を食べるて言わはったのは誰ですか？

吉蔵　う、ううん…。

（戸を開けて）

吉蔵　ただいま。

しの　あー、もう帰ってきはったんですか？　出掛けて四日しかたってへんのに、ほんまに山に行かはったんですか？　お友達のとこで、遊んではったんと違いますのんか？

吉蔵　あほ、そんなことしてへん（大きなクシャミ）。ちゃんと山で、滝に打たれて水行をして…（またクシャミ）あー体がぞくぞくして、頭が割れそうに痛いんや（ハクション・ハクション）そやから…。

吉蔵　金光様、えらいご無沙汰を致しまして…。

教祖　いろいろと、ご苦労なことがありましたね。

吉蔵　はあー、何もかもお見通しで…、お恥ずかしい次第です。

教祖　吉蔵さん、人間は人間らしくすればいいのです。何も自ら求めて、不思議な体験をし

なくてもいいのですよ。

吉蔵　は…はい。

教祖　表行より心行をせよと、神様はおっしゃいます。

吉蔵　表行とは…？

教祖　表という字に行と書いて、わぎょうと読みます。つまり表行とは、水の行・火の行・断食行などの、目に見える形での行です。

吉蔵　それでは心行とは？

教祖　読んで字のごとく心の行、心の働きですよ。つまり人に対して不平不満を持たず、物事の不自由を修行と心得、家業、つまり家の仕事ですな、それを一心に勤め、身分不相応を過ごさないように倹約をし、それを誰にも言わずに行えば、これが心行となります。

吉蔵　なるほど、なるほど、ええことを教えて頂きました。ありがとうございます。

教祖　心行は、心掛けさえすれば、日常の生活の中で出来ますからね。

吉蔵　はい、よう分かりました。

（昔の商店街のにぎわい）

しの　おおきに、ありがとさんでございます。

吉蔵　何や、ここのところ、店に、急に客が増えたな。

しの　そら、あんたがけったいなことをしはるから、どんな変人がいてるか、あんたの顔を見にきはるんですわ。

吉蔵　そら違うわ、わしが金光様に教えて頂いた心行に努めてるからや。

しの　何言うてはるんですか。

吉蔵　おまえこそ、何言うてるんや、わしがしっかりと家業を勤めてるからこそ、これこの様に…。

第四回「大願成就」

登場人物

佐藤範雄　二十代後半

登勢（とせ）（教祖夫人）　六十代

教祖

（アブラゼミの声、うるさく）

範雄　（独り言）暑いなあ…。だが、後もう少しの道のりだ…。

（走り出す）

範雄　（独り言）今のご時世は、自由に教えを広め

ることは難しくなっているけど、こんな良い話を金光様にお聞かせしたら、さぞ喜んでくださるだろうなあ…。

（つるべ、井戸の水音）

登勢　まあ、佐藤さんじゃありませんか。

範雄　あ、奥様。こんにちは。

登勢　この強い日差しの中を、汗びっしょりで、どうなさいました？

範雄　はい、金光様に急ぎのお知らせがありまして。

登勢　それにしても、お着物が汗ぐっしょり。ちょうど今、洗濯物をしておりました。この井戸で汗を流してくださいな。着物も家ので良かったらお着替えなさいませ。

範雄　ありがとうございます。それでは急いでおりますので、冷たいお水を一杯だけ。

（井戸水をくみ上げる）

範雄　ああ、冷たい、おいしい。すっきり致しました、生き返ったようです。

（また、セミの声）

範雄　それで金光様、教団の独立までの手順を鞆（とも）の浦の神社の宮司様に教えて頂きました。今は明治十五年、ぜひ、この機会に。

教祖　鞆の浦というと、吉岡様ですか？

範雄　はい、まずは教えを整え、金光教会を設立致します。

教祖　佐藤さん。

範雄　はい。

教祖　設立しなくても、人が助かりさえすれば、私は結構です。

範雄　え！　そんな！　…でも、でも金光様。近頃では人を助けることが難しくなっております。警察の取り締りや、他の宗派の迫害を受けて、難儀している者が大勢おります。辛抱していればそのうちに良くなるという状況ではありません。

教祖　ここに、岡山県の知事の認状（みとめじょう）がありますよ。

範雄　金光様、そんなものは役人の腹一つで、いつ何どき覆るか分かりません。それに、ご神前で祈ることや、お取次までは認められておりません。

教祖　でも、今はお取次も神様へのお祈りも、このように差し支えなく出来ていますよ。

範雄　それは、目立たないからです。参拝者が増えると、警察が黙ってはいません。金光様の教えを広めるのに熱心な大阪の近藤さんは、警察署に拘留されて、厳しい取り調べを受けているそうです。ですから、国に認められなければ取り潰されてしまいます。公認を得て独立すれば、天地金乃神様も、堂々とお祭りすることが出来ます。

教祖　お上が認めずとも、神様が認めて下されば

結構なのです。

範雄　それではこの道の神様のありがたさが、限られた者にしか分からなくなってしまいますが。

教祖　この道は神様がお開きになったものですから、すべて神様にお任せして…。

範雄　もちろん、それはそうですが、金光様を始め、各地でお取次をする者や、信者の働きあっての道でございます。お取次が出来なければ、「取り次ぎ助けてやってくれ」とお頼みになった神様の切なる願いが後の世に伝わりません。それに…。

教祖　それに、何ですか？

範雄　こんなことはとても申し上げにくいのですが…。あの、もし金光様がお亡くなりになりますと、世のはやり神と同じになりかねないと私は思います。

教祖　はやり神と同じ？

範雄　はい。鈴鹿様という徳の高い神主さんがおられまして、生神様と言われ多くの方々に慕われておりました。ところがお亡くなりになったら、すっかり寂れてしまい、今ではその石碑が残っているだけでございます。それに、金光の信心と言いながら、低俗なことを説いている者もおります。神様を汚すようなことになっては、申し訳が立ちません。

教祖　…。

範雄　このままでは、途絶えてしまいます。ですから、教えを世に出し、人が助かるこのお

道を存続させることが最も大切かと存じます。

教祖　うーん…。

範雄　金光様！

教祖　それでは、神様にお伺いしてみましょう。

（ひときわセミの声おこって消えていく）

範雄　金光様と一緒に私も一心に願った。どうかお聞き届け下さい…。やがて、暑さも気にならず、やかましかったセミの声さえも耳に入らなくなった。

教祖　神様からのお言葉がありました。

範雄　どのような？

教祖　「神の教えること、何かと書いておくがよかろう」とのことでした。佐藤さん、きっとあなたの熱意が、神様を動かしたのですね。

範雄　本当ですか！　お聞き届けくださって、ありがたいことでございます。

教祖　いいですか。決して、教会のための組織ではありませんよ。あくまでも人々が助かるための組織です。

範雄　はい、十分に心得ております。

教祖　まずは、どのようにしていけばいいのですか？

範雄　金光様のおっしゃる教えを、私が箇条書きに書き取ってまいります。

教祖　一つひとつ神様にお伺いし、間違いのない

ようにしないといけませんね。

範雄　これからは忙しくなります、金光様。

教祖　そうですね。

範雄　大願成就だ！　道が開ける！　…そうだ！

（走り出す）

範雄　この知らせを待っている人たちに早く知らせなければ…。（思わず叫ぶ）大願成就だ！！

第五回「神心」

登場人物

片岡次郎四郎　二十代
庄　（片岡の妻）二十代
老人　七十代
教祖

次郎四郎　もう泣くな、泣いても仕方のないことだ。

庄　（泣きながら）でも…上の子が幼くして病で死に、次に生まれた子もまた、幼くして病にかかって死んでしまった…。いっそ私が代わってやりたいくらい…。

次郎四郎　俺だって何もしなかった訳ではない。家相や地相を見てもらい、家も何度となく作り変え、家の後ろにある溝まで変えた。

庄　今、世間では、米は凶作だ、ききんだと言っている中、この片岡の家の商いはうまくいき、暮らし向きにも困りませんのに、なにゆえ子宝の運に恵まれないのでしょう。

次郎四郎　泣くなと言っておる！

庄　あなたは悲しくはないのですか？

次郎四郎　うるさい！　同じことを毎日毎日繰り返し嘆いても仕方がない！　子どもが生き返るとでも思っているのか？

庄　我が子を十月（とつき）もおなかに抱え、やっと生まれたら、夜泣きする子に乳を与え育てる、いとおしくてなりません。そんな女の気持ちは、男のあなたには到底分からないのです。そしていつも癇癪（かんしゃく）を起こしてどなりなさる。

次郎四郎　俺が癇癪持ちだと？

庄　ご自分で気が付いていないだけです。…もしかしたら…。

次郎四郎　何だ？

庄　何か災いをもたらすものに祟（たた）られているのかもしれませんよ。村の人は、「あの片岡の家は絶えるだろう、気の毒なことだ」などとうわさしています。ご存知なかったですか？

次郎四郎　何となく聞いてはいたが…。

庄　どこかの神様なり仏様へと、お参りした方がよいのではありませんか？

次郎四郎　どこか…など、いい加減なことを。

庄　…あ、そう言えば、先日出入りの商人が、大谷に金光様という生き神様がおられると話しておりましたよ。

次郎四郎　生き神様だと。

庄　何でも、親が子を抱くような慈愛に満ちた様子で迎えて下さったと、言っておりました。あなた、ぜひお参りに行って下さいな。

次郎四郎　大谷か…。

庄　峠一つ越えた向こうですよ。

次郎四郎　（独り言）山道はやっぱりきついなあ…。さっきまで散らついていた雪が、本降りになって積もってきた。おー寒い…。おっと、この先の二股道は右だったか左だったか…、おっ、右の方からお年寄りがやって来る。もし。

老人　はい。

次郎四郎　大谷へ参ります道はどちらの道でしょうか？

老人　私が来ました道です。

次郎四郎　ありがとうございます。後、どれほどの道のりでしょうか？

老人　一里半ばかりで。

次郎四郎　ありがとうございます。

（雪を踏みしめ少し歩く）

次郎四郎　（独り言）それにしても、今のお年寄りは、随分痩せ細っておられたが、今年の米の凶作で食べる物にも事欠いておられるのだろうか…。気の毒になあ。この寒さの中あのような薄着で…。そうだ！

（パタパタと走る）

次郎四郎　ちょっと、さっきのお方、お待ちください。

老人　何でしょう？

次郎四郎　この寒さの中、その姿では体にこたえます。私の着物を一枚。

（しゅるしゅると帯をほどき、着物のきぬ擦れの音）

老人　そのようなことは…。

次郎四郎　いえいえ、どうぞこれを着て行って下さい、私は若いから大丈夫です。

老人　ありがとうございます、ありがとうございます。

次郎四郎　はあー、やっと着いた。

教祖　おお、片岡さんよう来られました。

次郎四郎　は？　どうして私の名前を…？

もしや、あなた様が金光様…。

教祖　道中、結構なおかげを受けられましたなあ。

次郎四郎　おかげ、と申しますと？

教祖　気の毒なおじいさんに、あなたの着ていた着物を脱いで、着せてあげたでしょう。

次郎四郎　どうしてそれを…？

教祖　おかげとは、自分の物を人に上げたことが一つ。二つ目は我が身のことを忘れて人を助けたこと。そうして三つ目が、人をかわいそうと思う神心にあなたがなったということです。良いおかげを受けられました。

次郎四郎　はあー、そういうことでございますか。

教祖　人は生まれてくる時から、神様の心を頂いています。その心を大切にする生き方が大事なのですよ。かわいそうと思う心が神心です。さて…。

次郎四郎　は？

教祖　あなたはお神酒（みき）はお好きですか？

次郎四郎　お神酒と申しますと、お酒…？

教祖　はい。

次郎四郎　私は不調法でございまして。

教祖　それでは、一杯だけでも飲まれると良い。

次郎四郎　え？

教祖　お酒の好きな方には勧めません。そういう方はお酒にのまれてしまうから、飲まない方がいいのです。さ、どうぞ一杯だけ、冷えた体が温まりますよ。

（鳥のさえずり）

庄　すっかり春めいてまいりましたね。今日も金光様に月参りにいらっしゃるのですか。

次郎四郎　いろいろと、ありがたいお話が聞けるからなあ。

庄　そういえば…。

次郎四郎　何だ？

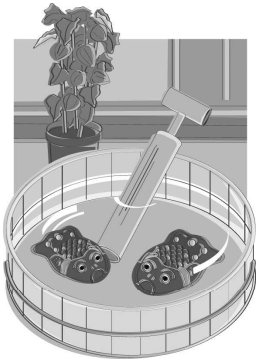
庄　あなたの癇癪持ちも、最近起こらなくなりましたねえ。

次郎四郎　何てことを言うのだ。

庄　ホホ…。

次郎四郎　うれしそうだな、癇癪持ちが治ったことがそんなにうれしいのか？

庄　いいえ、子どもを身ごもりました…。



第六回「病気見舞い」

登場人物

五兵衛　四十代
宗助　（同）
よね　（五兵衛の妻）三十代
教祖

五兵衛　宗助、暑いのに精が出るなあ。
宗助　やあ五兵衛、見てくれよ、この畑のナスの色…。
五兵衛　ほおー、紫色につやつやした立派なナスだ。俺んとこのきゅうりも立派に育ったよ。
宗助　今年は豊作だなあ。
五兵衛　ああ、お互い、暑い中働いたおかげだ。俺も精出して、もうひと頑張りするか。

（ピイピイ鳥のさえずり）

五兵衛　宗助、そろそろ昼飯にでもするか。…宗助！　…おい、宗助、宗助どうしたんだい。
宗助　腹が…痛い…。
五兵衛　食当りかよ。おーい、誰かいねえかー、おーい。…よし、俺の背中につかまれ！おまえの家まで負ぶってってやる。
よね　それでお前さん、どうしたんだい？
五兵衛　宗助のおかみさん、うろたえてるもんだ

からよ、俺が玄庵先生呼びに行った。

よね　先生何て？

五兵衛　癪（しゃく）だと。

よね　癪？

五兵衛　腹が痛いって、かなり苦しんでたからな。

よね　心配だねえ。

五兵衛　ああ。

よね　見舞いに行ってこようか？

五兵衛　今日はやめとけ。俺はあした、金光様の所に行って、宗助が助かるように、お願いしてくる。

よね　神様が病気を助けて下さるかねえ、それは玄庵先生の役目だろう。

五兵衛　俺が神様に祈ってるって分かったら、宗助だって心強いだろう。

よね　でも、病人の顔を見てやらないのは薄情じゃないかねえ。

五兵衛　薄情って…、そんなことがあるものか。具合の悪い時に見舞いに押しかけられたら、病人だってかえってしんどいだろうよ。

よね　あんたの幼なじみじゃないか、心配じゃないのかい？　私はあしたにでも行ってみるよ。

五兵衛　勝手にしろ。宗助の顔見たら、すぐに帰って来るんだぞ。

（板戸の開け閉め）

五兵衛　おーい、帰ったぞ。

よね　暑いのにご苦労さんだったね。それで金光さんに、ちゃんとお願いして来てくれたのかい？

五兵衛　おう、いろいろお話を聞いてきた。それで、宗助どんな具合だった？

よね　ぐったりして寝ていたよ。「まあー顔色悪いねえ、可哀想に」って、言ってあげた。

五兵衛　何てこと言うんだい！

よね　だって可哀想じゃないか。「災難だったねえ、ついてないねえ、おかみさんにも苦労掛けるねえ…」

五兵衛　おまえのおしゃべりの口がべらべら動いたんだろうなあ…。さぞ病人だって、おちおち寝てられなかったことだろうよ。

よね　だって、おかみさんも看病で疲れてるだろうと思ってさ、私がそばに付いててあげるよって言ったんだよ。

五兵衛　すぐに帰れって言っただろうが。

よね　そうしたらおかみさん、畑が心配だって畑を見に行っちまった、なかなか帰って来ないんだよ。せっかくおかみさんを休ませてあげようと思ってそう言ったのにさ。

五兵衛　おまえが宗助に言った事は全部間違ってる。

よね　何でだい？

五兵衛　病人に、「可哀想とか、顔色悪いとか、災難」なんて言うもんじゃない。

よね　だって、そのとおりだったんだよ。

五兵衛　そうかもしれないけど、それは見舞いに行って見舞いになってない。

よね　何で？

五兵衛　病の宗助の身にもなってみろ、そんなこと言われたら、余計落ち込んで、これは治らない、重い病だと思うだろ。

よね　まあー、そうかも知れないけどね…。じゃあどうすればいいんだい？

五兵衛　俺は金光様の所に行って、「宗助の病が早く良くなりますように…」と、お祈りした。金光様はこうおっしゃった。

教祖の声　見舞いの言いようで、病人の気分が強くもなり弱くもなる。せっかく見舞いに行く親切があるなら、病人の心が丈夫になるような見舞いの言葉を言ってあげるといいのです。病人が全快するような言葉を言うのですよ。そして悪いことを言わず、心配をしないように話す。病が治ることを祈っていると話す。

よね　そういうもんかねえ。

五兵衛　そうだよ、またこうもおっしゃった。

教祖の声　病人の家の人には、なるたけの手伝いをしてあげなさい。助ける道は色々ありますから。

五兵衛　おまえは宗助のおかみさんを助けてやったらいいんだよ。

よね　え？　…ああ、ご飯のおかずを作って持って行ってあげるとか？

五兵衛　そうだよ。

よね　おかみさん、畑と病人で手いっぱいだもんねえ。

五兵衛　…そうだ、俺も明日から宗助の畑の作物の取り入れを手伝ってやることにしよう。おまえも手の空いてる時に宗助の畑の手伝いをしに来いよ。

よね　家の畑はどうするのさ？

五兵衛　俺が二倍働く、子どもたちにも畑に来るように言ってくれ。

よね　三郎なんて、まだほんの子どもだよ。

五兵衛　子どもだって、草取りくらいは出来るだろ。

よね　そうだねえ、そうするよ。

五兵衛　宗助のおかみさんには、家で宗助の看病をするように言うんだぞ。畑のことは一切心配ないって言うんだ。

（鳥のさえずり）

五兵衛　今日もいい天気だ、ひと頑張りするか。…あれ、宗助だ。おーい、病は良くなったのかい。

宗助　色々世話になったな、ありがとうよ。いやあ、実は昨日ちょうど玄庵先生が来てた時だ。小便がしたくなった、まあその時の痛さといったらなかったよ。

五兵衛　ほうー…。

宗助　小便と一緒に石が出た。

五兵衛　え、石が腹の中から出たのか？

宗助　ああ、玄庵先生はな、これでもう良くなったと言ってくれたよ。

五兵衛　それは良かったなあ。

宗助　俺は金が入るより、石が出た方がよっぽどうれしかったよ。

五兵衛　ハハハ…。お天道様のもとでコツコツ働いてたら、お互い暮らしていけるものなあ…。ハハハ！

第七回「教祖が強盗をしている…？」

登場人物

芳三　三十代
つね　（同）
熊吉　（同）
教祖

（鳥のさえずり）

つね　芳三さん、おはよう。これから畑仕事かい？

芳三　やあ、おつねさんおはよう。なあ、徳川様が倒れて、明治の御世（みよ）になったというのに、近頃この辺りは物騒な世の中になったなあ。

つね　そうそう、米は凶作だし、コレラははやるわ、浪人は増えるわで。あんた知ってるか？

芳三　何を？

つね　ゆうべ、庄屋さんの家に強盗が入ったって。

芳三　えっ！

つね　食べるに困った人たちが入ったらしいよ。

芳三　そうかー、おっかないなあ。で、庄屋さんは無事だったのか？

つね　うん。

熊吉　おーい、芳三。

つね　あれ、熊吉さんだ。

芳三　慌てて、何だい？

熊吉　（息、ハアハア）村の者で自警団を作ることになってよ。

芳三　はあー？

熊吉　村が強盗に襲われないように、俺たちで守ろうってことになったんだ。

芳三　自警団って、いくら泥棒だって、俺たち貧乏人の家には入らねえだろう。

熊吉　貧乏だろうが金持ちだろうが、関係ねえらしい。村はずれの佐吉の家では、みんなが畑に行って留守の間に、おひつの中の麦飯まで空っぽになってたそうだ。

つね　へえー、おっかないねえ。あんたたちよろしく頼むよ。

熊吉　おつねさんも、早くから戸締りして、誰も入れねえようにするんだよ。

つね　それで、ゆうべはどうだったんだい？

熊吉　俺たちで見回りしてた時は何事も起こらなかったんだけどな、妙なうわさを聞いたんだ。

つね　うわさって？

芳三　金光さんが弟子たちと、夜な夜な強盗に入ってるんじゃないかって…。

つね　金光さんって大谷の神様だろ。いくら何だって…。

熊吉　でもよ、村の家は一軒残らず戸締りしてる

のに、金光さんの所だけは一日中、夜中も戸が開けっ放しなんだ。それに門の脇に米俵が積まれてるんだとよ、もしかしたら庄屋さんの所から盗んできた米じゃねえかって、うわさしてる。

つね　へえー。

芳三　それによ、金光さんのところにはえたいの知れない浪人たちが泊まったりするんだそうだ。

つね　それじゃ私、一度金光さんの所に行って聞いてこようかね。

芳三　つねさん、金光さんの所行ったことあるのかい？

つね　無いから行くのに決まってるじゃないか。

熊吉　気を付けてな。

つね　金光様こんにちは、つねと申します。

教祖　おお、つねさんよく来られました。

つね　ところで金光様ちょっとお尋ねを致しますが、この物騒な世の中なのになぜ夜中も戸を閉めずにおられるのですか？

教祖　それはいつなんどきここにお参りに訪れる人がいるかも知れません。神様にお願いのある人、または相談事のある人、夜に遠くから歩いてくる人。ですから表戸は昼も夜も開けておくのですよ。

つね　それでは用心が悪いのではございませんか？

教祖　いいえ、神様がちゃんと見ていてくださいますから安心です。

つね　では、ここに浪人たちが夜泊まったというわさは本当でしょうか？

教祖　はい。

つね　え⁉　浪人たちが強盗をするなどというわさもありますが？

教祖　あの人たちは、夜泊まっていっただけですよ。

つね　では…。

教祖　何ですか？　ああ、うわさの米俵のことですか。

つね　は、はい。

教祖　あれは以前から蓄えておいたもので、誰かのお役に立つかと思って、門の脇に置いてあるのです。

つね　…という訳でさあ。

芳三　えー、金光さんがそう言ったのかい？　誰かの役に立つと思ってって。

つね　そうだよ。

熊吉　でも、庄屋さんの家では米俵も取られたんだぜ。だってさあ、世間のうわさってのは、煙のないところには火は立たねえって言うじゃないか。

芳三　熊吉、それを言うなら、火の無いところに煙は立たねえだろ。

熊吉　そうとも言える。

つね　私は金光さんの言うことはもっともだって、感心したけどねえ。でも私はおっかなくて、浪人なんか家には泊めないけどね。

熊吉　よし、それじゃあ今夜芳三と一緒に金光さんの家の見張りをしよう。なあ芳三。

つね　寝ずの番かい、ご苦労さまなことだね。

（ピイピイ鳥の鳴く声）

芳三　（あくび）　あー眠たい…。

熊吉　俺もだ。

芳三　何言ってんだ、おまえ夜中にぐっすり寝込んでたじゃないか。

つね　おはよう、ゆうべも強盗騒ぎがあったの知ってるかい。

芳三　え、そうなのかい？

つね　で、あんたたち、金光さんの見張りはちゃんとやったんだろうね？

熊吉　おう、ちゃんと見付からねえように一晩中陰から見張ってた。

芳三　何だい、熊吉偉そうに。

つね　で、どうだったんだい？

芳三　金光さんは、一晩中神様の前から動かなかったよ。夜中にお参りの人が来て、「金光様、今夜は月がさえて奇麗です、外でご覧になったらいかがですか？」と言ったのに、「私は、世の人にけがや過ちがないように、神様にお願いしていますから、このご神前を動くことは出来ません」と言って座ったままだった。

つね　へえー、そうなのかい。

熊吉　それでよ、続きがあるんだ。

つね　何だよ？　もったいぶって。

芳三　実はな、朝になって俺たちが帰ろうとしたら、金光さんの奥さんが呼びに来た。

つね　びっくりしたろう？

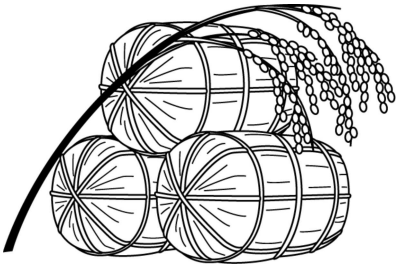
芳三　それで金光さんの所に行ったら…。

教祖の声　一晩中ご苦労さまでした。よく見張っていてくれました。これで私への疑いは晴れましたか。

つね　（笑う）

熊吉　（笑いながら）何でもお見通しで参っちまったよ。

芳三　全くなあ…。誰だよ、寝ずの番しようって言ったのは…。



第八回「厄年」

登場人物

福嶋儀兵衛　四十二才
みよ　三十二才
佐助　二十代
教祖

（火事。半鐘の音）

みよ　（走って来る）　儀兵衛さん儀兵衛さん、偉いこっちゃ。

儀兵衛　おみよさん、慌ててどないした？

みよ　か・か・火事や！　心斎橋の権三さんの家の方角やないかと思うんやけど。

儀兵衛　いや権三さんの家はもっと西の方やで。

みよ　そうかー。いやね、昨日厄年の話をしてたな、権三さん今年四十二歳の厄年なんやて。そやからわて慌てて心配してしもて…。

儀兵衛　それにしてもおみよさん、えらい格好やなあ。おでこにたんこぶ作って、手にぶら下げてるのは、鼻緒の切れたげたやないか。

みよ　そやから急いで走って来たら、石にけつまずいて、げたの鼻緒が切れて転んで、おでこぶつけましてん。あーあ、うちも三十三の厄年来年や、転んだの前厄やろか…。

儀兵衛　そんなアホなこと。

みよ　アホちゃいます。あのねえ、やっぱり厄年の平助さんが、こないだ泥棒に入られて、

ごっそり売上金取られたて言うてはった。

儀兵衛　それは聞いたけど…。

みよ　八百屋のおつねさん知ってるやろ？

儀兵衛　ああ。

みよ　おつねさん、やっと縁談がまとまりかけたら、厄年や言われて断られたて、泣いてはった。

儀兵衛　へえー。

みよ　儀兵衛さんも四十二歳でっしゃろ、気いつけなあきまへん。病気になった人もいるて聞くし。

儀兵衛　縁起でもないこと、言わんといて。それよりおみよさん、げたの鼻緒すげてあげますわ。

みよ　ほんまに、おおきに。

佐助　ごめん下さい。

儀兵衛　あ、これは佐助さん、おいでやす。

佐助　また、ご燈明の皿、頂きに来ました。

儀兵衛　毎度おおきに。ところで、ご燈明の皿、何という神様をお祭りしてはるんですか？

佐助　金光様という生き神様が岡山におられまして、ありがたいお方で、私は信心しております。

儀兵衛　ほうー、そうですか…。はい、どうぞ。

佐助　ほな、これお代。

儀兵衛　毎度おおきに、ありがとうございます。（みよに）おみよさん、金光様って知ってるか？

みよ　うちも知らんなあ、わては近くのお稲荷さんしか行ったことはないし。

儀兵衛　んー、一度行ってみようかなあ…。

みよ　へ？　岡山まで？

儀兵衛　そうかて、おみよさんが厄年厄年て言うから、気分が重とうなる。岡山まで船で行けるやろ、あの佐助さんに聞いて、その金光様とやらへ行ってみるわ。

儀兵衛　金光様、初めてお参りさせて頂きます。

教祖　遠方からよう参られました。

儀兵衛　お伺い致しますが、ここの神様はどういう神様なのでございましょう。

教祖　この神様は人間の親なのです。

儀兵衛　と申しますと…？

教祖　昔から、天は父、地は母というでしょう。実の両親は年を取ると亡くなってしまいます。しかし天地という親は亡くなるということがない。寒い冬が来てどうなるかと思っても、また今日のように暑い夏の盛りが来る、それは天地が生きているからです。

儀兵衛　ごもっともでございます。

教祖　ですから、あなたはこの天地の神様のおかげを受け、信心すればいいのです。

儀兵衛　それでは、どのようにして拝めばよろしいのでしょうか。

教祖　神様を拝むのに決まりはありません、形より心です。日々生かされていることのお礼をまず申し上げ、真心でお願いをすればいいのです。

儀兵衛　それだけのことで？　何か行のようなことは？

教祖　世間では、水の行、火の行などあるようですが、そのような行はしなくとも良いのです。それより毎日の家業を…。

儀兵衛　家業と申しますと、家の商売でございますか？

教祖　そのとおり、家業を信心の行と心得てしっかり勤めれば、それが神様のみ心にかないます。

儀兵衛　よう分かりました。それで…私は今年が厄年になりますけど、どないしたらええものですやろか、お伺いしたいと思いまして…。

教祖　この神様では、厄年の厄の字を、「人様の役に立つ」という役の字を使います。

儀兵衛　ははあ…。

教祖　ですから、やく年とは役に立つ年のことで、大やくの年というのは、一段と大きな役目を務める年と心得て、神様を信心し、人を助ける働きをすればいいのですよ。

儀兵衛　それは金光様、目からうろこでございますなあ。なるほどなるほど、厄年の厄は、「役に立つ」の役でございますか、ええことを教えて頂きました。何や身も心もすっきり軽うなりました。それでは信心する心で人の役に立つ、それでよろしいのでございますね。

教祖　そのとおりです。

（げたで走ってくる）

みよ　儀兵衛さん、おったおった。儀兵衛さん帰

ってるて聞いて。…どうやった？　厄年のおはらいしてもろたんか？

儀兵衛　いいや。

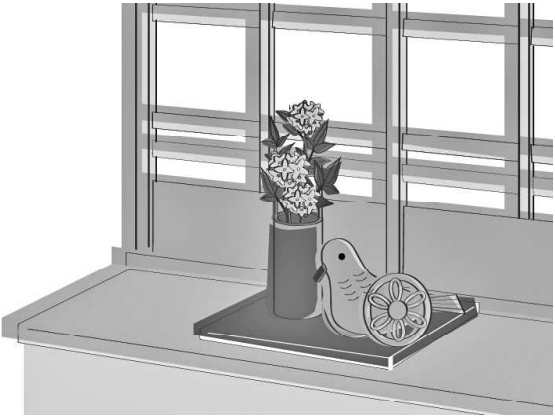
みよ　わざわざ岡山まで行って何でやの？

儀兵衛　おみよさんよう聞きや、厄年の厄というのは、ほんまは違うんや、人の役に立つ、「役」という字を当てて考えてみ。

みよ　役に立つの、「役」。そうかー、ほんまや、ええこと教えてもろた。早速、店の表に、書いて貼り紙しとこ。

儀兵衛　あんたとこ、うどん屋やろ、そんなん表に貼ってどないするねん。

みよ　（笑って）そやな。ほな店の中に貼り紙しますわ。みんな、安心しますやろ。



第九回「今日は吉日」

登場人物

太一　　四十才
さよ（太一の妻）同
教祖

太一　おさよ。

さよ　何ですか？

太一　近頃おきぬの様子がおかしい、元気がない。あのおしゃべり娘がとんと無口になって、何ぞ病にでも掛かっているのではないのか？

さよ　私も気が付いてはおりましたがねえ…、特に体の調子が悪いということでも…。

太一　やはり先日の縁談を断られたのが、こたえたのだろうか？

さよ　そういえば、あの頃からふさぎ込んでおりますねえ。お見合いの時、先方の方はおきぬが気に入っているようでしたのに…。

太一　わしが日柄をしっかりと見て決めた見合いの日だというのに、なぜだろう…？　おきぬはこの村で、小町娘と言われている娘だ、断る先方の気が知れない。失礼千万な話だ、おきぬも心が傷ついただろう。おまえ、一度おきぬに話を聞いてくれないか？　あの子はもう十七歳だ、早く嫁入り先を探さないと。

さよ　分かりました。

太一　食事も進まないようだ。もし病なら玄庵先生の所に…。

さよ　そんなこと分かっておりますよ。おきぬのことになるとおまえ様は大騒ぎなんだから…。お前様が自分でおきぬに聞いたらいいではありませんか。

太一　そういうことは母親が聞くものだ。

太一　それで、おきぬは何と言っていた？

さよ　（くすくす笑う）

太一　笑い事ではない！

さよ　だって…、あのお見合いの後、先方の方を送って行けと、おまえ様は言いましたねえ。

太一　ああ、言った。

さよ　おきぬは送って行って、ちょうど小川の近くまで行った時、いきなりやぶの中からイノシシが飛び出して来たそうですよ。

太一　何？　イノシシ？

さよ　ええ、おきぬは恐ろしくてびっくりして、腰を抜かしてしまったそうです。

太一　で、その、何だ、見合いの相手はおきぬを守ってやったのか？

さよ　いいえ、「ギャー」と叫んで、一人で走って逃げられたそうで。（また、くすくす笑い）

太一　何と、情けない男よの、だから格好悪くて見合い話を断ってきたのか。

さよ　多分そうだと、おきぬは言っておりました。

太一　だったら、かえって相手がどんな男か分かって良かったではないか。

さよ　そのとおりです。

太一　じゃ、なぜふさぎ込んでいる？

さよ　その時に、畑仕事を終えた徳三さんが通り掛かって、とっさに持っていたくわを振り回して、おきぬを助けて下さったそうですよ。

太一　ふん、徳三か…！

さよ　おまえ様が徳三さんのおやじ様と仲が悪いからといって、それとこれとは話が違いますよ。徳三さんはおきぬの難儀を助けて下さったのです。そもそもおきぬと徳三さんは幼なじみで、子どもの頃はとっても仲が良かったのですよ。

太一　そんなこと、おまえに言われなくても知っている！

さよ　それで…。

太一　何だ。

さよ　おきぬが言いますのに、徳三さんの所に嫁に行きたい、昔から好きだったと。イノシシの件以来、時々会っているようですよ。

太一　許さん！

さよ　だから、それが分かっているから、おきぬは悩んで、食も進まず、ふさぎ込んでいるのですよ。お分かりになりませんか。

太一　…。

さよ　おまえ様が反対していると、そのうちに二人で駆け落ちするかも知れませんよ。おまえ様はおきぬが可愛いのでしょう、だったら好き合った人と。

太一　しかし徳三の家は方角が悪い。うしとらの

方角、鬼門だ。そんな所に大事な娘をやれるか！

さよ　また、そのようなことを。先日の見合いの時も、日柄がどうだとか、昼過ぎからなら吉だとか、おまえ様がいろいろと口出しして、あげくの果てには、「イノシシ」ではありませんか。一度おまえ様が信心している金光様に、お伺いしてみたらどうですか？

太一　金光様、実はこのような訳で、どうしたものかと考えあぐねております。

教祖　太一さん、神様が日柄方角などというもので、人を苦しめることはないのですよ。

太一　はあ…？

教祖　例えばどんな人でも、生まれてくる日と死ぬ日を選んできた人はないでしょう。

太一　ごもっともです。

教祖　晴れた日もあれば、曇った日もあり、雨の日もあれば、風の吹く日もあるのが自然の天候で。晴れた日が吉で、雨の日が凶ということもない。吉凶の区別もないのに、人間が日柄や方角でそのようなことを決めるのは、不便を自分で作り出しているのです。

太一　なるほど…。

教祖　結婚は両方の家の都合の良い日が、良い日柄となるのです。結婚後幸せに暮らすことが大切でしょう？

太一　はい、確かにそのとおりでございます。

教祖　娘さんが幸せになられるように、ともに神様にお願いいたしましょう。

さよ　おまえ様、何をそんなにそわそわと。邪魔ですから、うろうろしないで下さい。

太一　こんな時に、お前は良く落ち着いていられるな。

さよ　じゃ、私はあちらに。

太一　わしも。

さよ　おまえ様は駄目です。

太一　おきぬが嫁いで一年余りで…こんな日が迎えら…。

（新生児の泣き声）

太一　生まれたー‼　でかしたぞー‼　おきぬー‼

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　0865-42-6453

FAX　0865-42-2114

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	土曜日 あさ5時10分	中国放送	土曜日 あさ5時50分
東北放送	日曜日 あさ5時00分	南海放送	日曜日 あさ6時00分
ニッポン放送	日曜日 あさ4時30分	RKB毎日放送	日曜日 あさ6時50分
東海ラジオ放送	金曜日 あさ5時25分	宮崎放送	日曜日 あさ7時10分
和歌山放送	日曜日 あさ6時50分		
朝日放送	水曜日 あさ4時50分		
山陽放送	日曜日 あさ6時35分		

こころで聴くおはなし　検索